

**【拠点形成概要及び採択理由】**

機 関 名	慶應義塾大学、独立行政法人理化学研究所、ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学、エコル・ノルマル・シュペリユール、エコル・ポリテクニク	
拠点のプログラム名称	論理と感性の先端的教育研究拠点形成	
中核となる専攻等名	社会学研究科心理学専攻	
事業推進担当者	(拠点リーダー) 渡辺 茂 教授	外 27 名

**【拠点形成の目的】**

本拠点では「論理と感性」の先端的教育研究を、海外の有力な教育研究機関と連携して世界最高水準で行うための拠点を形成する。21世紀COE「心の解明に向けての統合的方法論構築」では、人文科学の問題を実験科学の技法で解析し、そのデータを人文科学から再解釈することの繰り返しにより、研究がスパイラル状に発展することが、美的判断の実験心理学・脳科学研究や、論理の比較認知科学研究で明らかになった。また、これらの統合的研究に参加することにより若手研究者の研究遂行能力が飛躍的に伸びた。これらの成果をさらに国際レベルで発展させるため、グローバルCOEでは、21世紀COEでの中間評価が高く、統合的方法が効果的に機能した分野の課題として「論理と感性」に特化した先端的教育研究を行う。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる判断と感性による直感的判断がある。両者の関係は認識論の古くからの課題であるが、近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性が独立した過程ではなく、ひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではなく、脳科学的アプローチが必須であり、言語や文化による制約も大きい。本グローバルCOE拠点では、判断における論理と感性の統合を、最も基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、総合的に理解しようとする。具体的には、1) 論理は系統発生的にどのように発生したのか、2) 脳内機構としては論理と感性はどのような系を構成しているか、3) その遺伝と発達的变化はなにか、4) 論理・情報学的には論理と感性の相互作用はどのように表現できるか、5) どのような文化的制約があるのか、という5点を明らかにする。そして、その研究に参加することを通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し、国際社会に送り出すことを目的とする。心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点はそのような問題の中でも特に重要な論理と感性の協調と対立の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技术を併せ持った研究者を育成するものである。

**【拠点形成計画の概要】**

拠点は論理と感性の教育研究の中心に「コア教育研究プログラム」を設置し、国内、海外の連携拠点と密接な共同教育研究を行う。「研究施設」と「研究成果発信支援・評価プログラム」がこの教育研究を支える。そして、「特定課題教育研究プログラム」が大学院プログラムとして若手研究者育成を行う。

「コア教育研究プログラム」: 脳と進化、遺伝と発達、言語と認知、哲学・文化人類学、論理・情報の5チームを設置し、拠点リーダーのもとに論理と感性についての先端的教育研究を展開する。ここには若手研究者が常時配置される。

「特定課題教育研究プログラム」: 事業推進担当者は大学院生とともに研究を立案し、「コア教育研究プログラム」に申請して特定課題の研究を実施する。大学院生はこのプログラムを大学院科目として履修し、研究の実践を通じて分野融合的研究のすすめ方を習得する。

「研究施設」: 研究の実施を物理的に支えるのが「研究施設」(脳研究施設、動物実験施設など)である。21世紀COEでは、脳研究のために脳波計、光トポグラフィ、経頭蓋磁気刺激装置を導入したが、皮質下の機能測定は困難であり、特に感性の研究にはfMRIによる脳深部の機能計測が必須である。その為、MRIを導入する。動物実験施設、発達研究施設は既存のものがあるが、これを拡充し、先端設備をととのえる。

「研究成果発信支援・評価プログラム」: 若手研究者の国外での研究発表の効果的成果発信を支援するもので、論文作成の指導から海外の第一線で活動するための戦略的指導まで行う。また、研究成果の内部評価も行う。なお、これとは別に海外の委員を含めた「外部評価委員会」を設ける。

「国内連携拠点」: 本拠点の研究目的にもっとも近いテーマを研究している理化学研究所・脳科学総合研究センターの「象徴概念発達研究」チームと連携し、拠点全体として細胞レベルから脳のシステム、個体、進化、さらに文化にいたる広い視野での研究を行う。

「海外連携拠点」: 本拠点の教育研究に効果的に連携できる先端的教育研究機関として現在5つの機関と提携関係を締結しており、そこからは5名が事業推進担当者として共同研究を行う。ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学とは比較認知、脳、発達の共同教育研究、エコル・ノルマル・シュペリユール、エコル・ポリテクニクとは認知科学、言語、論理、哲学の共同教育研究を行う。これ以外にも、言語学ではコネチカット大学、文化人類学ではマッギル大学と密接な研究協力関係にあり、これらをふくめて5年間で15拠点程度に海外連携拠点を増やし、本拠点を基点とするグローバルな国際教育研究ネットワークを構築する。

「国際教育研究プログラム」: 上記の海外連携拠点で、海外事業推進担当者と連携して若手研究者が共同研究や発表を行うもので、2007年にもいくつかのプログラム実施が合意されている。

「ネットワーク形成」: 「先端学術研究ネットワーク」(既存)に基礎をおいた連携ネットワーク形成を行う。これにより、国内、海外の拠点間での、高速、リアルタイムの情報の交換、共有が可能になる。

「若手研究者の雇用と経済支援」: 21世紀COEでは常時2名程度の常勤研究員(ポスドク)と数名の非常勤研究員が雇用されていたが、本拠点では最終的に年間12名程度のポスドクを雇用する。プログラム終了時までに本拠点でのポスドク経験者30名程度を輩出し、その半数を海外に送り出すことを想定している。

機 関 名	慶應義塾大学、独立行政法人理化学研究所、ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学、エコル・ノルマル・シュペリユール、エコル・ポリテクニク
拠点のプログラム名称	論理と感性の先端的教育研究拠点形成
<p data-bbox="175 286 327 318">〔採択理由〕</p> <p data-bbox="162 324 1428 660">人文科学における伝統的認識の問題であり、人間判断の基本に関わる、論理と感性の関係性のメカニズムの解明に焦点を当て、21世紀 COE プログラムにおいて形成されている海外拠点を、世界的規模で展開し、強力な連携ネットワークと共同教育研究システムを構築することによって、世界レベルの研究活動ができる若手研究者の育成を目指す、世界的教育研究拠点として高く評価できる。さらに、本拠点は、21世紀 COE プログラムにおいて確立した、「人文科学と実験科学間での相互スパイラル的往復運動」という新しい研究方法を基礎に置き、人文科学と脳科学を基盤に据えた実験科学との文理融合型研究を推進・発展させる新しいタイプの若手研究者の育成を目指しており、その成果が期待される。これまでの国際的連携拠点との教育研究活動の実績も高く、計画全体が高い成果を上げることが期待される優れたプログラムである。</p> <p data-bbox="162 667 1428 922">人材育成面において、本拠点は、体系的知識を習得し、必要ときに学際的知識を積極的に獲得しようとし、研究者自らが国際的ネットワークを持ち、国際的に活躍しうる、世界的レベルの研究をリードしようとする意識と意欲を持った若手研究者の育成を謳い、そのような人材の育成目標数を明確に掲げている。このことは、本拠点の若手研究者育成にかける熱意と責任の表明であると高く評価できる。本拠点は、高い研究水準にある海外連携拠点との研究と、研究者養成の優れた実績を有しており、若手研究者に海外での研究を義務づけているプログラムの実現性も高く、この取組は高く評価できる。</p> <p data-bbox="162 929 1428 1079">研究活動面においては、本拠点の事業推進担当者となるほぼ全ての研究者が博士号取得者であり、各研究者の業績は、いずれも国際的に高い水準にある。その成果は、レベルの高い研究雑誌に発表されている。また、各研究者は、多くの海外の大学や研究所との間で共同研究の実績を積み重ねており、この国際教育研究拠点が研究の連携においても高い実効性を持つと評価できる。</p> <p data-bbox="162 1086 1428 1227">ただし、人文科学と実験科学の融合については、これまでも多くのプロジェクトで提案してきたものではあるが、これまで必ずしも実りのある成果が上がっていない。本プログラムでも、この両者の融合的研究のできる若手研究者の育成を標榜しており、その観点から、効果的な融合的研究を実現するための工夫されたシステムを検討することが望まれる。</p>	